

毛呂山の俳人

せきふ

川村碩布と野口有柳

うりゆう



碩布建立の川角八幡神社の芭蕉句碑（毛呂山町指定文化財）
「道傍の むくげは馬に 喰われけり」

俳諧と松尾芭蕉

はいかい ばしゅう

俳諧

五七五の17文字からなる俳句は、その短い節のなかに季語を含ませて、季節を詠みこむ簡潔な短詩です。

日本の俳句の歴史上、最も有名な俳人のひとりが松尾芭蕉でしょう。その松尾芭蕉が志した俳諧こそ、俳句のルーツといえます。もともと俳諧とは、中国で滑稽を表す言葉で、機知に富んだ言葉が即興的に口に出る状況を指しました。

松尾芭蕉

松尾芭蕉は、江戸時代前期、伊賀上野（現在の三重県上野市）で生まれました。29歳のころ俳諧師として江戸に出ると、それまで滑稽を特色とした俳諧文芸に芸術性を取り入れました。彼の「わび・さび」に表されるその幽玄・閑寂な作風は、のちに「蕉風俳諧」といわれ、以後の俳人の手本となりました。



一本松の碩布の句碑
（毛呂山町指定文化財）

「色かへぬ かはりやまつに 秋の声」



川村碩布肖像
（歴史民俗資料館蔵）

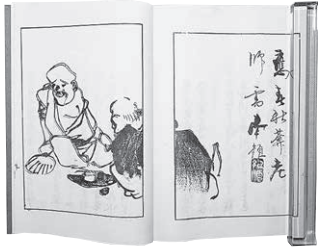
川村碩布

毛呂山の生んだ俳人・川村碩布は、寛延3年（1750）武蔵国入間郡馬場村（現在の毛呂山町毛呂本郷）の裕福な名主の家に生まれました。

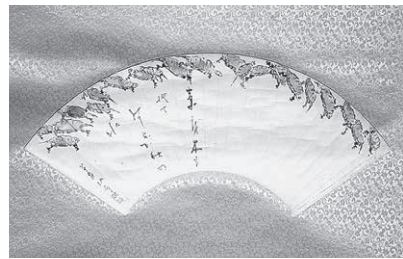
若いころより風流を好み、とりわけ好きな俳諧の道に進むため、天明元年（1781）、32歳のときに江戸日本橋で4千人ともいわれる門弟をもつ、蕉風俳諧の大家、春秋庵加舎白雄の門弟となります。後にその八哲（白雄の八大弟子のこと）に数えられる俳人になり、文化13年（1816）69歳のとき、春秋庵を受け継ぎました。

碩布の作品

碩布の主な著書には、加舎白雄の三回忌に編んだ『しら雄く集』、一門の俳諧撰集『春秋稿（第八編）』、『掃庭春



『春秋稿（第八編）』
村田忠次郎氏蔵
（歴史民俗資料館寄託）



龍 図
村田忠次郎氏蔵
（歴史民俗資料館寄託）

「草も木も 捨てはしるや 秋の水」

帖』、自選句集『布鬼圍』（稿本）、紀行集『穂家露』、加舎白雄と八人の高弟の句集『八翁六百題発句集』があります。また、碩布十三回忌の追善集として『碩布発句集』が刊行されています。

また、碩布は俳画も好み、梅や亀を描いた作品を町内外に数多く残しています。おだやかで情感あふれる画風で、俳人の余技以上の技量を感じさせるといわれます。

碩布の功績

碩布は、恩師である白雄の名跡、春秋庵をよく守り、久米逸淵や加舎梅笠、野口有柳といった後進を育てました。白雄派の俳諧を明治の代まで伝えたことは、碩布の大きな功績といえます。碩布は、その活躍で俳諧史に名声を残し、天保14年（1843）、94歳の天寿を全うし、毛呂本郷地内の妙玄寺にある川村家の墓地に葬られました。

川村碩布・野口有柳をめぐる年表	
寛延3年（1750）	川村碩布、武蔵国入間郡馬場村（現在の毛呂本郷）に生まれる
安永9年（1780）	加舎白雄が春秋庵を江戸に開く『春秋稿（初編）』刊行
天明元年（1781）	碩布、江戸に出て春秋庵白雄に入門する
寛政3年（1791）	碩布の師・加舎白雄没 常世田長翠が春秋庵を継ぐ
寛政5年（1793）	碩布、師・加舎白雄の追悼句集『しら雄く集』を編さんする
文化2年（1805）	碩布、『穂家露』の信州旅行に出る
文化6年（1809）	野口有柳、川角村に生まれる
文化13年（1816）	碩布、春秋庵の名跡を継ぐ（文化10年（1813）常世田長翠が没す）
文政7年（1823）	碩布、善光寺詣の旅に出る『春秋稿（第八編）』を刊行
文政9年（1826）	碩布、この頃から俳画を描き始める
文政12年（1829）	碩布、この頃、春秋庵の名跡を久米逸淵に譲る
天保6年（1835）	碩布、臥龍山出雲伊波比神社へ俳額（町指定文化財）を奉納する
天保7年（1836）	碩布の代表的自選句集『布鬼圍』の草稿ができきる
天保14年（1843）	川村碩布没。妙玄寺に葬られる（享年94歳）
嘉永2年（1849）	有柳、師・碩布の旧号「可庵」を継ぐ
慶應2年（1866）	碩布の遺稿をまとめた『春水集』（青荷編）が刊行される
明治7年（1874）	野口有柳ら数名で俳諧明倫講社（俳諧を神道の教義に結びつけたもので、明治俳諧の一大勢力だった社）を作る
明治12年（1879）	有柳、春秋庵の名跡を継ぐ『春秋稿（第十編）』を刊行する
明治26年（1899）	野口有柳没。川角地内に葬られる（享年85歳）



現在の姨捨（長野県千曲市）の風景

碩布と旅

俳人・川村碩布は、春秋庵の俳諧を広めるため、多くの俳人たちと交流しました。県内では、弟子や後援者が多くいた本庄、深谷、熊谷など中山道沿いの宿場町に向き、県外では上州、信州、多摩地域に足を伸ばしました。更に、壮年期には関西方面にも旅をしたことがわかっています。

『穂家露』

碩布の生涯のうち、最も有名な旅が、文化2年（1805）と文政7



『穂家露』
村田忠次郎氏蔵
(歴史民俗資料館寄託)



川村碩布句碑
(長野県千曲市 姨捨長楽寺)
「姨石の 高き忘れて 月や月や」

年（1823）の二度にわたる信州旅行です。先の文化2年前後は、碩布の父・金左衛門が没し、家督を継いだ碩布が加舎白雄の追悼句集『しら雄く集』の出版に尽力していた時期です。このときの旅は紀行集『穂家露』にまとめられました。この題名は「穂屋祭」という諏訪大社の神事を指し、碩布も旅の最終目的地として諏訪を訪れています。『穂家露』の文中、碓氷の関所（現在の群馬県安中市）では

雨水とて水ももらさぬ 関所かな
という句を詠んだと伝えられています。また姨捨（現在の長野県千曲市）で詠んだ

姨石の高き忘れて 月や月や
などは碩布の代表句のひとつです。

姨捨という地

姨捨は、長野盆地に位置し、古来から東山道の支道、善光寺道の要所でした。盆地の南西部にある姨捨山は、『大和物語』や能で有名な姨捨伝説で知られた山です。また、盆地の斜面一帯に小さな水田が階段状に並び、近くの長楽寺は、それらの水田に映る月（田毎の月）を鑑賞する名所として、藤原定家や松尾芭蕉ら多くの文人たちが、歌や句に詠んでいます。この地には、碩布の句碑が建てられています。



川村碩布句碑
(本庄市 八幡神社)
「春の水 ゆふ山はれて 流れけり」



川村碩布句碑
(寄居町 蓮光寺)
「名月の ひと夜にきざむ 仏かな」

野口有柳

うりゅう

碩布の後継者

川村碩布の後継者、野口有柳は、文化6年（1809）、川角村に生まれました。若くして晩年の碩布から俳諧を学び、20歳のころ、碩布の『菑庭春帖通名』という刷り物に「雨柳（川角）野口力松」として入集しています（『菑庭』は碩布の別号、「雨柳」は有柳の初号）。

有柳は、天保10年（1839）に、碩布とともに『俳諧人名録』に掲載され、その名を全国に知られるようになりました。そして、嘉永2年（1849）に、師・碩布の旧号である「可庵」を継ぎ、明治12年（1879）に、71歳にして俳諧流派の名跡である春秋庵を継承します。

春秋庵主になった有柳は、同年に『春秋稿（第十編）』を刊行しています。そのほか、有柳の編著には、明治16年（1883）刊行の『はなかげ』や、明治23年（1890）刊行の『古今五百題』などがあります。

有柳は、明治26年（1893）に俳諧の教導職である大講義に任ぜられ、その46日後に85歳の天寿を全うし、川角地内に葬られました。

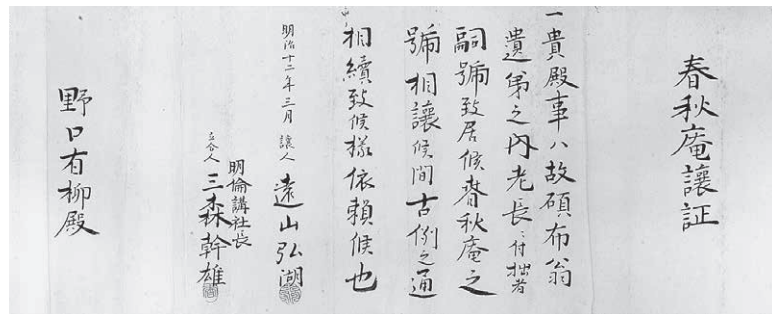
有柳の書跡

俳画を好んだ碩布と違って、有柳は絵を描かず、専ら書に親しみました。有柳の書跡は多く、書家としても大家でした。有柳（可庵）の名は、現在も毛呂山を中心に、近隣の市町村にある句碑・筆塚・墓石・俳額などに見ることができます。



野口有柳一行書
(歴史民俗資料館蔵)

春秋庵讓証

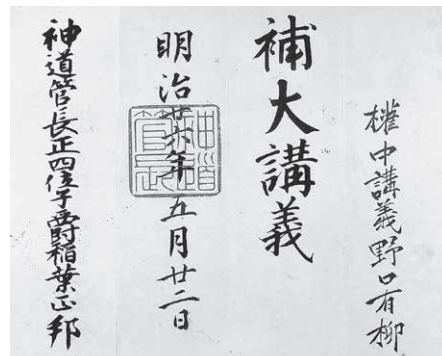


春秋庵讓証（明治12年）
(歴史民俗資料館蔵)



野口有柳の墓
(毛呂山町指定文化財)
「のちの世へ まだ見残して 月と花」

補大講義



大講義任命書（明治26年）
(歴史民俗資料館蔵)

取材協力

長野県千曲市／姨捨長楽寺（長野県千曲市）
／蓮光寺（寄居町）／八幡神社（本庄市）
毛呂山町歴史民俗資料館

参考文献

毛呂山町史／新毛呂山町史／第十二回特別展
「芭蕉のころ—毛呂山ゆかりの文人・川村碩布と野口有柳—」（毛呂山町歴史民俗資料館）
／「檀寮碩布と春秋庵をめぐる人々」（内野勝裕著・まつやま書房）